早稲田大学

図書館紀要

第59号

東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故から一年

飯島昇藏

三・一一の大地震の衝撃を館長室の机で感じた。何度目かの激しい揺れに椅子に座していられず、平静を装いつつ図書館の前の小さな広場に出て、空を見上げ辺りの様子をうかがう。桜の大木が揺れ、中央図書館が不気味に軋む音をいまに覚えている。

大学は卒業式も入学式も中止し、新学期の開講を五月連休明けにするという前代未聞の決定をした。図書館は職員はじめ、関係するすべての人々が協力して、地震直後から通常開館への一刻も早い復旧をめざし懸命の努力を続けた。この間、断続的に関係する管理職で協議を繰り返し、具体的な開館時間などを随時決定し、可及的速やかに本来の体制にすべく、対処していった。

一見すると休講を続ける大学の対応と矛盾する決定のように映るかもしれない。台風や麻疹などで大学が臨時休講を決定したとき、図書館もそれにあわせて閉館してきた。しかし今回はそうしなかった。直接の被災地だけでなく、首都圏にも「節電」という形で大きな影響が出ていた時期ではあったが、しかし、それでも教育・研究の場として大学を求める学生、研究者も多くいたはずである。そうした人々に、文字どおり学習・研究の場を提供すること、それこそがあの時の図書館にできる最善の策だと考えたからの決断であった。

本来ならば卒業式が行われるはずだった三月二五日の前後の数日、中央図書館の正面入り口に、祝辞を添えた花束を飾り、図書館を利用してくれた卒業生たちの門出の餞とした。幸多かれと！

2012年3月